

留学報告書

生駒勇人

留学開始から二年が経ち、MITの修士課程卒業しました。以前の報告書で述べていたとおり、MIT Media LabにはPh.D.取得する予定で留学を開始しましたが、MITは修士課程で卒業し、別の大学院へ進学することを決断しました。この報告書を読んでいるほとんどの人は学位留学希望者であると思います。最近ではこの報告書を読んだ人から問い合わせのメールが来ることもあります。そういった人たちは、すでにたくさんの留学経験談について読んでいることと思います。しかし、そういった経験談は多くの場合、留学の明るい側面ばかり綴られていることが多いです。そこで、今回の報告書では大学院留学は失敗する可能性も大いにあるということを知ってもらうため、前回の報告書で予告した通り、この二年間の苦悩について綴ります。

前回の報告書で述べた通り、この二年間は研究が非常に難しいと感じていました。自分がやりたいと考えている研究と、自分の教授が私にして欲しいと考えている研究に埋まらないとても深い溝があったことが大きな原因です。同期の大学院生たちは楽しそうに授業を受け、自分がやりたい研究プロジェクトを遂行している一方で、私は一つも自分の研究プロジェクトを持っていないという状況が一年ほど続いていました。唯一教授から言い渡されたことは、〇〇に関わることで何かして欲しいということでした（具体的には言えませんが、〇〇は”電子デバイス”、”金属”などの分野を総称する言葉です。）。しかし、〇〇は自分の専門知識からも興味からも大きく外れており、研究グループの主軸とは全く違うものでした。当然、〇〇に関わる実験環境もありませんでした。それでも何とかしようと〇〇に関する論文や教科書を読みあさり、その分野の専門家と何人も話をし、必死でプロジェクトを始めようとしていました。しかし、結局プロジェクトを始めることすらできず一年がたってしまいました。唯一手を動かせたと感じることができた時間は、サイドプロジェクトとして関わるように言われた、自分の興味とは全く一致せず、自分の意見は全く反映されない、他の大学院から来ていたVisiting studentの雑用とも言える肉体労働でした。このような自分の状況を研究室のポスドクたちや友人たちに相談しましたが、最終的に言われた一言は「助けられない」でした。色々と言ってくれる仲間はいましたが、結局は自分一人で何とかしなければならぬという現実を突きつけられました。このとき、すでに自分でできる最大限の努力をしていると思っていた私は、絶望に満ちていたように思います。同じ奨学金を頂いている仲間たちが楽しそうにしている話を聞くことが本当につらかったです。今まで、努力をすれば何とでもなると思っていましたが、努力は正しい場所で行わなければ徒労に終わるということを初めて経験しました。

この苦しい状況が一年以上続き、二年目の冬を迎えました。大学院の出願時期です。MIT Media Labに所属する学生は全員修士課程から始めることが義務付けられており、博士課程に進学するためにはもう一度Media Labに出願する必要があります。別の環境に移動したいと考えていた自分には良い機会だと考え、別の大学院に出願することに決めました。しかし、ここまで何も成果をあげることができていなかった自分には強力な推薦状は期待できないので、

トップスクールへの合格は難しいだろうと考えていました。結果を言ってしまうと、いくつもの米国の大学院を受験しましたが全て不合格でした。ただ唯一合格した大学院はフランスの Ecole Normale Supérieure de Cachan (ENS-Cachan) でした。受験する研究室を探していた当時、フランスやスイスで研究をしていた研究室の同期に薦められ、フランスのある教授にメールをしたことが始まりでした。この教授は現在最も成功している画像処理のアルゴリズムをいくつも開発した数学者です。私のバックグラウンドは数学ではないですし、まさか自分に興味を持たれるとは思いませんでしたが、どの奨学金と大学院のプログラムに出願すれば良いのかを事細かく指示して頂き、結果的に二つの奨学金と大学院のプログラムに合格することができました。正直、フランスの大学院への受験は全く考えていませんでしたし、ENSという名前すら知りませんでしたが、私が合格した応用数学のプログラムは周囲に聞いてみると世界的に非常に有名であることを知りました。直接面識がないにも関わらず、出願の手助けをして下さった教授に感謝しています。

合格の可能性はほぼないと感じている出願に悩まされつつ、研究も何とかしようと努力を続けていました。○○についてプロジェクト案を考えている一方で、自分が得意な分野でプロジェクトを始めることができないかと模索していました。以前の報告書で述べましたが、Media Lab は企業スポンサーからの研究資金で大半の研究が行われています。そのため、スポンサー企業とのコラボレーションをすることもあり、様々な企業とミーティングをすることがあります。そのようなミーティングの中で、指導教官の興味をひくような企業を見つけ、スポンサー資金をわずかながらも獲得し、大幅に妥協はしつつも自分のプロジェクトを始めることができました。開始時は教授の興味をひくことを優先したため、開始後も何とか自分の得意とする領域にプロジェクトを転換する努力をしました。その結果、MIT内の別の研究所や、友人の研究室の装置を借り、友人に実験サンプルの作製をお願いするなどして、自分でも納得ができる研究を最後半年間はすることができました。これまで、材料工学、細胞生物学、光学顕微鏡、応用数学という多岐に渡る学問を学んできましたが、それらの知識を紡ぎ合わせた研究を完遂し、最終的に論文を提出することができました。この結果には非常に満足しています。その一方で、この裏で起こっていたことを研究室の同僚から研究室に行く最終日に打ち明けられました。プロジェクトを何も始めることができないでいたとき、私は研究室を追い出されようとしていたということです。最大限まで努力をしていましたが、私のコミュニケーション能力の低さから、何もしていないように見えていたのだと思います。しかし、私の働きぶりを見ていた二人の博士研究員が私をかばっていてくれたようでした。この二人は研究に関わる本質的でない難しい事情をどのように切り抜ければいいのかを理解しており、的確なアドバイスをくれる本当に尊敬できる研究者でした。この二人から学んだことは多く、どれだけ感謝しても感謝しきれません。

卒業式を控えた一週間前、驚きの誘いを受けました。前述した博士研究員の一人であり、私に「助けられない」と言ったオフィスメイトがStanford Universityの教授職を獲得していたのですが、彼の研究室の一人目の大学院生として是非来て欲しいと誘われたことです。すでにENS

の奨学金と大学院のプログラムのオファーを受諾していたことやその他の問題もあり、残念ながらこの誘いを受けることはできませんでしたが、彼が私の能力を認めていてくれたことを非常に嬉しく思っています。どういう形になるかはわかりませんが、近い将来彼の研究室で研究をしたいと考えています。

今回の報告書では、あまり語られることがない大学院留学の困難について述べました。もし語られていたとしても、それほど悲壮感があるものは見かけたことは私はありません。達筆でないためうまく書くことができませんが、数え切れないほど自分ではどうすることもできない困難がありました。二年の留学生生活を終え、最終的には自分が留学前に考えていた分野で論文を投稿するところまで辿り着き、自分の中で理想的なオファーを二つも貰うことができました。結果だけを見てしまうと、一見ただ成功しているように見えてしまいます。しかし、実際にはMITで修士号を取ることもできずに帰国という最悪の結果と紙一重であったと思います。大学院留学が楽しく実りのあるものになるかどうかは、自分の努力だけではどうしようもない側面があり、運の要素が強いと私は思います。しかし、どのような困難な状況に陥っても、常に自分のベストを尽くすことで、成功への道は切り開かれると私は信じたいです。